

ンによる化学療法を施行し、その治療成績について検討した。CPT-11; 150 mg/m²を Day 1, 15に5FU; 600 mg/m²を Day 3~7に点滴静注し、これを1コースとして、5例に対し平均40.4日周期で、1~4(平均2.8)コース施行した。副作用では、WBC減少 Grade (G) 4; 2例, G 3; 3例, Plt減少 G 4; 1例, 下痢 G 2; 5例に認められた。評価可能病変を有するものは4例で、子宮頸部腺癌では PR 1/2, NC 1/2, 子宮体癌では PR 2/2例であり、全体として奏効率は75%であった。全例担癌生存中であり、平均生存期間は41.8カ月であった。以上より、本レジメンの有用性が期待された。

11) 難治性胚細胞腫瘍に対する3回連続の末梢血幹細胞移植併用高用量化学療法の試み

西山 勉・照沼 正博(厚生連長岡中央総合病院泌尿器科)

通常の化学療法や、単回の末梢血幹細胞移植併用高用量化学療法(HDCT+PBSCT)では完治できなかった難治性胚細胞腫瘍2例(左精巣腫瘍多臓器転移(複合組織型, 病期ⅢC)症例と縦隔腫瘍(絨毛癌)多発肺転移症例)に対して導入化学療法(CDDP, VP16, BLM., 3コース)後に3回連続のHDCT+PBSCT(CBDCA, +VP16, +IFM, ±TESPA, ±MXT, +PBSCT)を試みた。HDCT+PBSCTは1コースを6週間で行った。2例ともPBSCT後の骨髄機能の回復は良好であった。1例は早期に癌死したが、1例は癌なし生存中である。この様な Germ Cell Consensus Classificationで POOR PROGNOSISに分類される難治性症例に対しては、今回試みたような複数回のHDCT+PBSCTを考慮する必要があると思われる。

12) 腹腔内大量出血により発見された膀胱後部平滑筋肉腫の一例

有本 直樹・小松原秀一(県立がんセンター)
渡辺 学・北村 康男(新潟病院泌尿器科)
田中 乙雄・佐藤 友威(同 外科)

症例は72歳男性。平成10年4月17日、腹痛にて来院。腹部は緊満しており、CTにて14×12cmの膀胱後部腫瘍、多量の腹水を認めた。検血にて著明な貧血があり、腫瘍からの腹腔内大量出血によるショックと診断、当院外科緊急入院となった。輸血、および血管造影下に左内

腸骨動脈からの腫瘍栄養血管の塞栓術を施行しショック状態は改善した。4月20日当科紹介、転科となった。経直腸エコーで腫瘍は膀胱や前立腺とは境界されていた。腹水細胞診はclass II。5月7日手術施行、開腹所見にて広範な腹膜播種が存在、術中迅速病理で悪性所見(+)であった。しかし腫瘍組織はもろく出血がコントロールできないため、根治性はないものの両側内腸骨動脈を結紮後腫瘍摘出した。病理診断は平滑筋肉腫であった。術後経過は良好で5月28日退院した。平滑筋肉腫に対する化学療法にはあまり有効なものがなく、広範な腹膜播種の存在も考え、このまま経過観察の予定である。

13) 乳癌微小転移のマーカーとしてのKeratin-19 mRNAの検出

佐藤 豊二(新潟県立がんセンター 生化学検査室)
本間 慶一(同 病理部)
牧野 春彦・佐野 宗明(同 外科)

乳癌患者の微小転移を検出する目的で、腋窩リンパ節よりkeratin-19 mRNA(K-19)の検出を試みた。対象は1996年4月-1997年11月までに腋窩郭清(Level II)を施行した乳癌100例の連続症例である。郭清リンパ節は2分割し、病理検索と本検出に使用した。検索方法はReverse Transcriptase Polymerase Chain Reaction(RT-PCR)である。結果は、sensitivityが64.9%と本検索のqualityを問われる問題に直面した。この問題を解決するために、1) Southern法によるPCR産物の確認、2) primerを変えて低分子のK-19を標的とする、3) thermal cyclerの機種を変更する、などの施行錯誤を試みた。最終的にはsensitivityが94.6%に改善された。この経緯も含めてK-19検出の試みを報告する。

14) Chronotherapyを応用したFLMP療法—第5報、乳癌に対する効果について—

横森 忠紘・家里 裕
小林 功・綿貫 啓(小千谷総合病院)
徳峰 雅彦・村岡 正人(外科)

【目的】当施設ではBiochemical modulationを考慮した多剤併用化学療法に、生体の日周リズムに基いた時間治療学(Chronotherapy)の理論を導入したFLMP療法を施行している。今回は進行再発乳癌に対

する効果について検討した。

【方法】レジメンは、5FU 500 mg day 1～5(cont), LV 20 mg day 1～5 (PM6), MMC 2 mg day 5 (AM9), CDDP60～80 mg day 5 (PM5)である。5FU は24時間持続で5日間投与するが、腫瘍の増殖が盛んな夜間に投与量を増加する。LV は5FUの効果を増強させるため夜間に投与する。5日目にCDDPの不活性を防ぐためMMCを先行投与した後、CDDPを夜間に投与する。CDDPを高濃度投与する場合、5FU先行投与にのみ相乗効果が得られるとされる。この場合5FUはCDDPのmodulatorとして作用する。また、CDDPを夜間投与することにより生体の腎毒性、消化器毒性が軽減できる。1クール4週で、点滴静注または肝動注で施行した。

【結果】3クール以上投与した進行再発乳癌5例の奏効率はCR1, PR2の60%で、grade3以上の副作用は食欲不振5%, 悪心嘔吐5%, 白血球数減少5%で極めて軽微であった。

【まとめ】生体の日周リズム (Circadian rhythm)を考慮したFLMP療法は副作用が少なく、有効性が期待できる治療法である。

15) 乳房温存療法の放射線治療

植松 孝悦・齋藤 眞理
石川 浩志・椎名 眞 (新潟県立がんセン)
清水 克英・小林 晋一 (ター放射線科)
佐野 宗明・牧野 春彦 (同 外科)
本間 慶一 (同 病理)

【目的】乳房温存術後の放射線治療成績と副作用について検討する。【対象と方法】1993年4月から1997年8月までに当院で乳房温存術が施行され、温存乳房に放射線治療が施行された138症例139乳房。平均年齢は49.6歳(28-75歳)。病理学的病期I期110例、II期21例、III期1例、分類不能7例。放射線治療は温存乳房全体に6MVX線を用いて、1回2Gy、週5回、計46-50Gyの対向二門接線照射を施行した。切除断端陽性症例には計10Gyの追加照射を電子線にて腫瘍床に施行した。【結果】観察期間の中央値20.5か月(8.1-61.1か月)で、温存乳房内再発は1例(0.7%:1/139)であった。副作用は症状を伴う放射線肺炎を1例(0.7%:1/139)認めた。5年累積生存率、健存率は各々96.8%, 94.9%であった。

16) 食道癌術後化学放射線療法の初期経験

末山 博男 (新潟県立中央病院 放射線科)
穂苅 市郎・豊田 精一 (新潟労災病院 外科)
相馬 剛 (新潟県立中央病院 外科)
長谷川正樹 (新潟県立中央病院 外科)

1997年3月より食道癌術後の局所制御の改善を目的として、食道癌術後症例に対して放射線と化学療法の同時併用を行った。放射線治療は通常分割で、総線量45-55Gy(5-6週)投与した。化学療法は5-FUの少量持続静注(250mg/m²)とCDDP(3mg/m²)少量連日静注である。これまでの対象症例は6例であり、照射理由はさまざまであった。放射線は全例完遂できたが、化学療法は2例が白血球減少のため中止となった。副作用は白血球減少と置換した胃管の胃炎が容量制限となった。観察期間が短いため全例無病生存しているが、今後さらに副作用の少ないregimenを検討する必要がある。

17) 80歳以上の高齢者食道癌に対する放射線治療成績

石川 浩志・植松 孝悦 (新潟県立がんセン)
齋藤 眞理・椎名 眞 (ター新潟病院)
清水 克英・小林 晋一 (放射線科)

目的: 当院で放射線治療を行った80歳以上の高齢食道癌患者の予後と問題点を検討する。対象: 1985年-1997年の間に当院で放射線治療を行った80歳以上の食道癌患者は40例であり、病理学的に扁平上皮癌と診断されたのは37例であった。このうちUICC病期分類(1987年版)のI-III期および遠隔転移が頸部リンパ節に限られるIV期の症例のうち、根治照射を目的に放射線治療を開始した34例を対象とした。方法: 線量別、病期別、一次効果別に生存率を検討した。結果: 線量別では、50%生存期間は総線量60Gy以上で13ヵ月、60Gy未満で3ヵ月であり、60Gy以上で有意に良好であった。病期別ではI期が有意に良好であった。一次効果別では有意差は認められなかった。60Gy未満では、合併症で全身状態が悪化し、照射を中止している症例が多く認められた。考察: 80歳以上の食道癌患者の放射線治療では、合併症に十分注意し、60Gy以上の照射を行うことが重要である。